

International Exchange

パタナシン芸術大学との交流展 平成28年

富山大学芸術文化学部教授 高橋 誠一



2016年1月8日～31日の日程で、タイ王国バンコクのパタナシン芸術大学構内のワンナーギャラリーにおいて、学部間交流協定に基づく第3回交流展が開催された。芸術文化学部から私が国際交流委員会副委員長、辻合秀一准教授が国際交流展WG員として、2人で、その展覧会の作品搬入、芸文側作品の展示レイアウト及び作品展示を行い、オープニングセレモニーに、出席してきたので、記録と報告を兼ねて本稿を寄稿する。

今回の展覧会について述べる前に少しこれまでの経緯について触れておこうと思う。

富山大学芸術文化学部とパタナシン芸術大学との学部間交流協定が結ばれたのは、平成24年1月である。今回の展覧会が、第3回と名打っているのは、交流協定締結後に、その協定に基づき行われた展覧会が3回目ということである。しかし協定が結ばれる前に、パタナシン芸術大学と芸術文化学部教員が関係する展覧会が開かれている。それは平成23年1月に富山県民会館美術館にて行われた「タイと日本と現代美術2011」である。パタナシン芸術大学教員33名、芸術文化学部造形芸術コース担当教員7名及び名誉教授1名で開催されている。

前記展覧会の流れを受けての展覧会として、第1回交流展は、平成25年3月に、今回と同じ会場のパタナシン芸術大学構内のワンナーギャラリーにおいて開催された。前記展覧会の流れを受けての展覧会であるということは、その展覧会名称が「タイと日本と現代美術 平成25年」となっていることから伺える。本学部からの出品者は教員と大学院生で、図録で確認すると、その数は25名となっている。パタナシン芸術大学からの出品者は教員のみで、その数は47名であった。

第2回は、平成25年12月に、富山大学芸術文化学部のTSUMAMA-HALLで行われた。展覧会名称は「富山大学芸術文化学部 パタナシン芸術大学 交流展」とした。本学部からの出品者は教員と大学院学生で、これも図録で確認したところ、その数は21名と1グループであった。パタナシン芸術大学からの出品者は教員のみで、その数は30名であった。この2回の展覧会は、学部間協定の締

結を記念して行われた展覧会としての意味合いが強く、1年の間にタイ（バンコク）と日本（高岡）と、相互の大学の所在地で行われている。2回の交流展が行われたのち、交流展を開催するにあたっての本学部とパタナシン芸術大学との間で相互交流展に関する覚書を締結し、今後は隔年で交互に交流展を開催していくこととした。

その覚書に沿って開催された第3回交流展は、冒頭にも書いたが、平成28年1月8日～31日の3週間あまりの期間、タイ王国バンコク市内のパタナシン芸術大学構内にあるワンナーギャラリーにて、開催された。本学部からの出品者数は教員、大学院学生を合わせ44名、パタナシン芸術大学側の教員出品数は52名に及び、過去2回の展示作品数を上回る規模となった。今回、両大学ともに出品者数が過去最高で、特に芸術文化学部からの出品者数が、第2回の21名と1グループから比べると倍増となる44名が出品した。内訳は教員23名、大学院学生21名である。国際交流委員会の下、パタナシン交流展WGを組織し、積極的な活動が実を結んだ結果であると思われる。

展覧会名称は「タイと日本と現代美術 平成28年」となっていた。タイ側が主体で展覧会を行う時にはこの名称を使っていく様である。芸術文化学部が主体となつて行った展覧会は第2回の1度であるが、名称は「富山大学芸術文化学部 パタナシン芸術大学 交流展」としていたので、一つの交流協定、一つの覚書に基づいて継続開催されている展覧会としての名称としては、少し疑問が残るところである。今後、両者の話し合いで、良い名称に落ち着くことを望む。

作品の会場への到着が遅れ、とても慌ただしい搬入作業、開梱作業を行い、すべての作品が揃ったところで、粗々のレイアウトを決め、作品と展示台を配置した。タイ側の作品展示とのバランスをとりながら、作品の展示を決めていく作業は、多くの方が想像するより重労働であった。日本側のスタッフが2名という少ない人力での作業での肉体的疲労に加えて、作品配置レイアウトを考える頭脳労働は、大変に疲れる作業であった。しかしな



なんとかオープニングセレモニー迄には作業を終えることが出来た。

オープニングセレモニーには本学から高橋と辻合准教授の2名が出席した。ファックチャマルーン・シリチャイチャーントイ王国パタナシン芸術大学長が開会の辞を述べ、パタナシン大学関係者と芸術文化学部長からの挨拶（高橋が代読）があり、テープカットと続き、式典が執り行われた。式典の後は、パタナシン芸術大学長が、会場を廻るのに合わせて、日本側作品の解説を行った。その後は、会場と外の空間を使ってパーティーが行われた。

私たちは、そこまでの仕事を終え、その日の深夜にバンコクを出発する飛行機に乗って、慌ただしくタイを後にした。

展覧会はその後3週間ほど続き、終了した時点で、タイ側のスタッフにより梱包、搬出作業が行われ、高岡まで送り返されてきたのであるが、そこで3点ばかり問題が発生したので、ここに記録しておく。

最初に発覚したのは、鍛金技法で作られた作品に凹みがあったこと。その報告が上がってきたので、他の出品者にも、作品の確認を改めてお願いしたところ、2件目として、漆の作品に傷が認められたこと。3件目は、作品を取めた箱に作品が無く、一時期作品が行方不明になったこと。当該作品は、他の全然関係ない箱（パンフレットが入っていた箱）に収められていたのが発見された。破損のあったものについては、輸送時の損害として処理することで保険対象となるとのことで、作者の意向に沿って処理された。決して軽微な問題とは言えないことが起きているのと、展覧会自体の目的など、次回展覧会が開催される来年度に向けて、質の良い展覧会を維持していく方策の策定が、早急に必要になってくるだろう。

